

先日、書店に寄つたら『満洲国』という新書が目にとまった。昨年、女房の叔母が93歳で逝った。叔母は無論のこと、以前に亡くなった叔父とお祭りで一緒に酒を飲んだときも、軍人として満州(現在の中国東北部)にいたなどと話したことはなかった。

叔母の遺品の中に小さな革のトランクがあり、中から満州国の債券や預金通帳、勲章などが出てきた。今では何の価値もなくなつたこれらの書類を、なんで75年も大事にしてきたのだろう。そもそも満州国とは何だったのであらうか。

「赤い夕陽の満州」という言葉がある。多分、軍歌だったように思う。私は2度「満州」に沈む夕日を見たことがある。1回は平成16(2004)年、政府派遣慰霊巡拝団の一員として、ロシアの沿海州ニコリ

スク付近から、目の前に広がる草原を真っ赤に染めて沈む夕日を見た。

もう1回は平成23(2011)年、旅行会社が募集した松本空港からのチャーター便「ロシア4日間の旅」でハバロフスクへ行き、ホテルの窓から見た。眼前に広がるアムール川の中国名は黒龍江、川の中央が

叔母の遺品

国境だ。川面まで赤く染めて沈む夕日、あの太陽の落

ちる所が「満州」だと思った。

満州国は1932年から13年間存在した。しかし、学校でも教わっていないし、具体的には何も知らない。本を読んで勉強しよう。叔母の遺品の書類はトランクごと松本市文書館に寄贈した。何かお役に立つのだろうか。お礼に文書館の利用者証を頂いた。

点差口

こうさてん

(松本市白板1、平岡武、76歳)